特別支援教育センター研究紀要，7，27―37（2015）

知的障害を伴う聴覚障害幼児ときょうだい児による積み木遊びにおける会話の発達的変化※

佐　藤　亜　貴※※・永　井　美　穂※※※・太　田　富　雄※※※※

知的障害を伴う聴覚障害幼児ときょうだい児を対象にして，積み木遊びにおける会話の発達的変化を見た。発話の機能分析カテゴリーを作成し，①兄弟間での会話，②兄弟と指導者との会話での発話機能を分析し，発達的変化を検討した。その結果，聴覚障害幼児は，兄弟間での発話総数が大きく伸び，会話の内容にも多様性が見られるようになった。しかし，指導者が加わると，応答率が低下し，3人以上での会話にはついていけなくなることが示された。集団での会話が困難な聴覚障害幼児の特性が明らかになり，質問や呼びかけ方の工夫が必要と考えられた。

キーワード：知的障害，聴覚障害幼児，積み木遊び，会話，発話機能

Ⅰ．はじめに

子どもが成長過程で経験する人間関係は，①親子関係，②きょうだい関係，③友人関係となる。

柴田（2010）は，親子関係が子どもの社会性の発達にもたらす影響については，これまで多くの研究がなされてきたのに対し，きょうだい関係について扱った研究は極めて少ないと指摘している。また，それらの内容の多くはきょうだいの人数や出生順位に関する研究であり，子どもの社会性について言及している研究は少ない。

子どもの社会化におけるきょうだい関係の役割として，遊びや喧嘩を通して自己主張や自己抑制，他者配慮などの社会的スキルを学習することができる（吉田，1991）ということがある。きょうだいは親子関係と友人関係の中間に位置付けられ，重要な発達期をともに過ごすため，子どもの対人関係や，性格形成に多大な影響を与える存在であるとされている。このきょうだい関係の特徴としては，①相互交渉の頻度が多い，②興味が類似している，③模倣的なやり取りが多い，④世話や愛情の行動がみられる，⑤感情の抑制が少ない，などが挙げられている（飯野，1996）。Hartup（1981）もまた，きょうだい関係について，この関係による相互交渉が，幼児期の社会化に独特の役割を果たしていると述べている。さらに，きょうだいの相互交渉は家族以外の子どもとの相互交渉に先行しているため，家族関係と仲間関係の橋渡しになるとも述べている。。

昨年度，対象児（A児）の象徴機能の発達に目を向け，母親とのままごと遊びを通した指導を行った。対象児が積極的に母親に働きかけるようになり，さらには会話が連続するようになった（大塚・小大塚・鶴，2012）。しかし，この研究結果はコミュニケーションの相手が対象児をよく理解している母親であったからこそ得られたものであるとも考えられる。というのも，当時の対象児は第三者から見ると不明瞭な言葉が多く，会話を続けようとしてもうまく聞き取れない言葉も多くあったからである。

これらより，母親以外とのコミュニケーションの第一歩として兄弟児とのコミュニケーションについて検討することにした。今回コミュニケーションの対象を兄弟児に限定した理由として，対

※　A case study of language development in playing with blocks by hearing impaired child and hearing brother

※※　国立病院機構岡山医療センター
※※※　学校法人東福岡学園自由ヶ丘幼稚園
※※※※　特別支援教育センター
聴覚・言語障害教育研究部会

象児が母親に次いで安心して接することのできる相手であることや，対象児とより年齢の近い兄弟児を会話の対象とすることで，同年代の幼児とのコミュニケーションの基礎を築くことができると考えたためである。

本研究では，積み木遊び場面における兄弟児のみの会話，兄弟児並びに指導者との会話の観察を行うことにした。兄弟児のみでなく，指導者を遊びに参加させた理由は，①会話のきっかけを作る，②会話の内容の整理・代弁，③発話機能の向上，④他者への興味・関心を持たせることである。

遊びの素材として積み木を取り扱う理由として，藤崎・無藤（1985）が以下の２点を上げている。１点目は，役割などと異なり，子どもの言明がなくともその使用について客観的に記述しやすいこと等の研究方法上の利点である。２点目は１人が積み木遊びを行うことで，もう一人の積み木遊びを誘発して共通の場をつくり相互作用成立を促進する。さらに，それによって積み木遊びのテーマやイメージを共有する割合が高いことである。

子どもの言語発達を考えるうえで，象徴機能の発達との関係が深いことが指摘されている。小山（2002）は，「知的障害や自閉性障害がある子どもの場合，比較的時間をかけながらも象徴的世界を形成し，他者とかわす言葉の意味世界を構築し，自ら言葉を使用することによって記号の恣意性を理解して，言語的世界を形成していく」と述べている。また，「知的障害や自閉性障害のある子どもにおいて，象徴遊びが豊かになってくると，発話が増加し，生産的になってくる」ということも指摘している。このような点からも積み木は既成の玩具に比べ自由に象徴遊びやごっこ遊びができるため，イメージの共有から会話が生まれやすいということが考えられる。

本研究では，①兄弟間での会話場面，②兄弟児と指導者での会話場面における発話機能を分析することで，発話機能の発達的変化およびその特徴を明らかにすることを目的とした。

Ⅱ．方法

１．対象者

５歳の知的障害を伴う聴覚障害幼児（以下Ａ児とする）と４歳になるＡ児の弟（以下Ｂ児とする）の２名を対象とした。Ａ児のABR検査（CA：４歳８ケ月で実施）の結果は，

右耳　1000Hz：40dB，2000Hz：20dB，
　　4000Hz：40dB，
左耳　1000Hz：50dB，2000Hz：30dB，
　　4000Hz：40dB

であった。田中ビネー知能検査Ｖの結果はIQ70。遠城寺式・乳幼児分析的発達検査では，CA：４歳５ヶ月で，運動４歳０ケ月，基本的習慣４歳０ケ月，対人関係３歳８ケ月，発語３歳４ケ月，言語理解４歳０ケ月であった。本児はB大学病院において難聴と発達遅滞の診断を受けている。

今年度における観察開始時の対象児には，幼稚園で他の幼児とのやりとりやコミュニケーションに問題があった。対象児は園の中でもほとんど一人遊びをしていて，他の幼児との相互交渉がみられなかった。会話の中で母親や兄弟児間のみで意思の疎通が可能な非言語的な要素（視線，あいづち，ジェスチャーなど）が多く，第三者とのコミュニケーションに困難さがあった。幼稚園に行きたがらない時期もあり，他の幼児とのコミュニケーションの困難さによるものが影響しているのではないかと懸念されていた。

２．観察・記録方法

１）使用した積み木の種類

対象児が観察以前から関心を示していた木製の積み木を使用した（Fig.１）。積み木の他に，対象児が気に入っていた車型の木製玩具を加えた。

立方体…小(7)，中(4)，大(16)，６面に穴の開いたもの(1)
直方体…２×４×８cm(16)，2.5×５×10.5cm(13)，
　２×４×16cm(3)，４×４×８cm(7)，
　３×３×12cm(1)，２×２×15cm(1)，
　４×４×16cm(1)，2.5×５×21cm(2)，
　２×４×４cm(3)，2.5×５×５cm(4)，
　0.5×１×４×８cm(1)，0.5×３×17cm(1)，
　１×４×16cm(1)，１×７×７cm(2)，
　１×8.5×14cm(1)，
　６面に穴の開いたもの(1)
円柱……小(2)，中(4)，大(1)，平らなもの(1)
三角柱…小(1)，中(1)，大(6)
その他…車型の木製玩具（大・中・小　各１），
　平面の卵型(1)，台形方(2)，平行四辺形型(2)，
　直角三角形型(1)，五角柱(1)，その他(5)

Fig.１　使用した積み木　（　）内は個数

2）観察・記録の手続き

原則として週に１回，90分の指導の時間内において，積み木を用いた自由遊びの活動を20分間設けた。遊びの様子はビデオカメラで記録し，指導終了後にVTRの再生を行い，発話を中心に遊び場面並びにエピソードについて，ノートに詳細に書き起こした。また，表情や視線といったような非言語的表出も逐次的に書き起こした。指導は2012年４月から11月までの８ヶ月の全10回で，そのうちビデオカメラの不具合や，対象児が途中で積み木に興味を示さなくなった回を除く計６回の結果を分析の対象とした。時間は20分間とし，指導者（以下，Ｔとする）は前半の10分間は幼児の遊びや会話には参加しない立場をとり，後半の10分間は幼児の会話に介入した。介入方法としては，主にＡ児に対して会話を促すような問いかけを行い，一緒に遊びに参加するなどした。観察は３名で行い，１名はビデオカメラで積み木遊びの様子を撮影し，もう１名は幼児の近くでその場の様子を記録したのち，介入に参加した。さらに，もう１名は隣室のモニターによりＡ児の不明瞭な発音を母親に確認しながらエピソード等の記録をした。

3）分析方法

今回の研究では，積み木を用いた自由遊び場面の会話をビデオテープに録画し，その間に生起したＡ・Ｂ児の発話や発声，遊びの様子をすべて文字化した。この記録を基に，１.発話総数の変化の観点，２.自由遊び場面における兄弟児間の発話機能の変化，３.働きかけに対するＡ児の応答率の観点から分析を行った。原則として各月に１回ずつとし，９月を除く４月から10月までの計６回を分析の対象とした。この際，観察者の合議に基づき，発話機能を分類した。発話の機能分析カテゴリー表（Table１）は，健聴児の母子相互作用に関する先行研究（Dore，1978；大浜他，1984）を参考に作成した。

Table１　発話の機能分析カテゴリー

カテゴリー	定　　義
行動提案	「～しよう」「～したら」「どうぞ～」などの行動提案
行動要求	「ゆっくりね」「そっとね」など，具体的な行動を求める
説明要求	「だれ？」「どうしたの？」「なに？」など，命令や説明を求める
説明要求への返答	命令や説明の要求への答え
聞き返し	「ん？」「なんていったの？」などの聞き返し
聞き返しへの返答	聞き返しに対してもう一度言い直すなどの返答
注意喚起	「ほら」「危ない」「気をつけて」などの注意喚起
禁止・拒否	「いけません」「やめなさい」「ちがうでしょう」「いやだ」などの禁止や拒否
教示・報告・説明	教示や説明，報告，命名
内的表出	自分の感情表出，相手に対する評価など
受容・理解	「そうね」「そうしよう」などの受容，了解やなだめ
オノマトペ	「トントン」「チョキチョキ」「ジャー」などの擬音語・擬態語
確認	教示・説明を受け，模倣したり触ってみたりして確認する
その他	上記のカテゴリーに分類できない言葉や，意味不明のもの

Ⅲ．結果と考察

今回の研究では，１.発話総数の変化，２.自由遊び場面における兄弟児間の発話機能の変化，３.働きかけに対するＡ児の応答率の観点から分析を行った。

１．発話総数の変化について

ここでは発話総数の変化についての観点から検討していく。前半10分のＡ児とＢ児の発話総数の推移（Fig.２），Ｔも含めた後半10分の発話総数の推移（Fig.３）をまとめた。

前半10分のＡ児の発話総数は，４月の７回から７月の78回と大きく増加している。８月，10月はやや低下している。また，Ｂ児の発話総数は，４月の５回から７月の85回まで大きく伸び続けてはいるが，Ａ児と同じく８月と10月がやや低下し

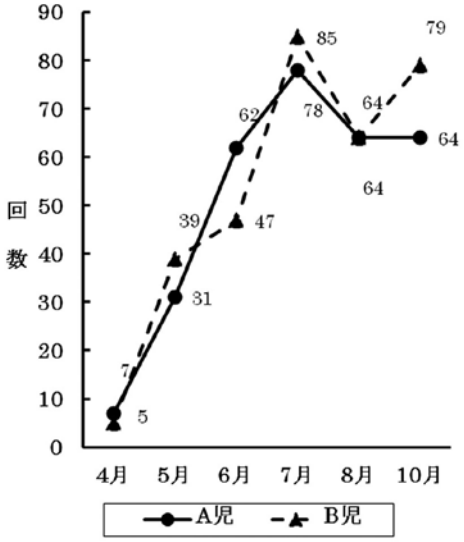

Fig. 2　前半10分の両対象児の発話総数の変化

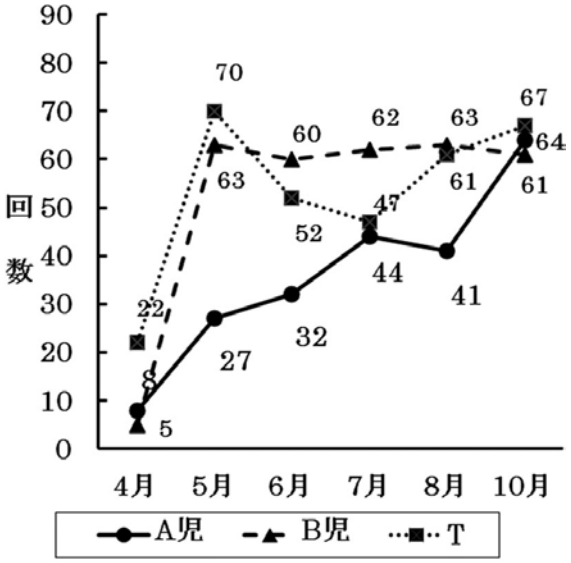

Fig. 3　後半10分の両対象児の発話総数の変化

ている。

まずＡ児の発話総数が増加した理由として，以下の３点が考えられる。１点目は，Ａ児とＢ児の遊びの形態が，平行遊びから協同遊びに変わったことが挙げられる。４月は平行遊びであったためお互いが顔を合わせることもなく，ほとんど会話がなされなかった。沈黙も多く，積み木で何かを作り上げるという作業の中で相互交渉する様子はほとんど見られなかった。しかし，５月以降は遊びの形態が協同遊びになり，それぞれがどのようなイメージで積み木を組み立てていくかを話し合いながら遊んでいく様子が見られるようになった。そのため，発話総数が伸びたと考えられる。２点目は，Ｂ児の発話総数が増加したことが挙げられる。４月の会話の内容として，Ａ児が話しかけ，Ｂ児が返事をしては会話が終了するというパターンが多く，発話総数が伸びなかった。しかし，５月から協同遊びをするようになったことで，Ａ児の発言にＢ児が答え，そこから会話が連続することが多くなった。また，Ｂ児からＡ児に対する発言も増加したことで，Ａ児もそれに答えるために発話総数が増加したと考えられる。３点目としては，Ａ児の内的表出が増えたことが挙げられる。内的表出は，５月から徐々に増加し，７月の最高17回まで伸びている。内的表出が伸びると，Ｂ児にうまく自分の感情やイメージを伝えられるようになる。これによって，会話総数が増加したと考えられる。

次に，後半10分の発話総数の変化についてみていく。まず，前半10分は月日の経過とともに右肩上がりに両対象児の発話総数が伸びていることに対し，後半はＴが介入することによって，両対象児の間に総数の差がみられた。その顕著な例が５月の結果である。この理由としては，Ｔの関わり方に対するＢ児の反応の仕方が影響していると考えられる。介入の際，Ａ児の発言をより引き出すために，Ｔは「Ａ君，今何作っているの？」などのように，先に相手の名前を呼ぶことでＡ児の注意を向けさせるようにしていた。また，Ａ児に発言のきっかけを与えるために，Ｂ児よりＡ児に優先的に質問をするようにしていた。しかし実際には「Ａ君」と呼びかけているにもかかわらず，Ｂ児がその質問に答えてしまうという場面が多くあった。そのため必然的にＴの発話数に沿うようにＢ児の発話数が伸び，両対象児の発話総数に差が生まれたと考えることができる。

しかし，観察当初こそ両対象児の発話総数に大きな差が見られていたものの，月を追うごとにその差が縮まっていることが分かる。Ｔの発話総数にはさほど変化がない一方で，Ａ児とＢ児の発話

総数は均等になりつつあったのである。10月になるとＴと両対象児の発話総数がほぼ等しくなりつつあり，三者の会話がよりバランスのとれたものになっているということができる。実際の会話の内容からも，観察当初と比較して会話が連鎖するようになり，Ａ・Ｂ児ともに発話総数のバランスがとれてきたということが窺える。後半は両対象児ともに発話総数が減少しているが，これは単にＴの介入により人数が増えたことで，対象児一人あたりの発言の機会が少なくなったことが主な原因であると考えられる。

発話総数の変化という観点からこの結果について振り返ると，前半，後半ともに増加傾向にあった。また，前半10分では，Ａ児とＢ児の発話総数がほぼ同数で伸びている。しかし，観察開始時の後半10分では，Ｔの介入によりＡ児とＢ児，またはＴとの発話総数に大きな差が見られていた。この差は観察を重ねるごとに徐々に縮まりつつあった。これはＴの関わり方がＡ児の発言を促すきっかけになっていたのではないかと考えられる。しかし他の幼児や第３者と関わる際，必ずしもＡ児に対して特別な関わり方をしてくれるわけではない。ＴのようにＡ児が話すきっかけを作り，話すことを待ってくれる人はごく一部である。この３人の間で行われたような会話ややり取りを普段の生活や遊びの中に広げていくことが他者とのコミュニケーションを築くための基礎となりうると考えられる。

２．自由遊び場面における兄弟児間の発話機能の変化について

次に自由遊び場面における兄弟児間の発話の機能分析の変化について検討していく。発話の機能分析カテゴリー（Table１）に基づいて会話の内容を分類した。ここからは回数の推移に特徴的な変化が見られたカテゴリーについて分析した結果を述べる。今回の分析で取り出したカテゴリーは，①行動提案 ②説明要求への返答 ③禁止拒否 ④受容理解 ⑤内的表出の５つである。まず，行動提案について述べる（Fig.４）。行動提案は，Ａ児が４月から５月にかけて一時減少しているが，６月から７月まで大幅に増加し，８月でまた減少している。８月から10月までは大幅に増加している。まず４月から５月にかけて減少している

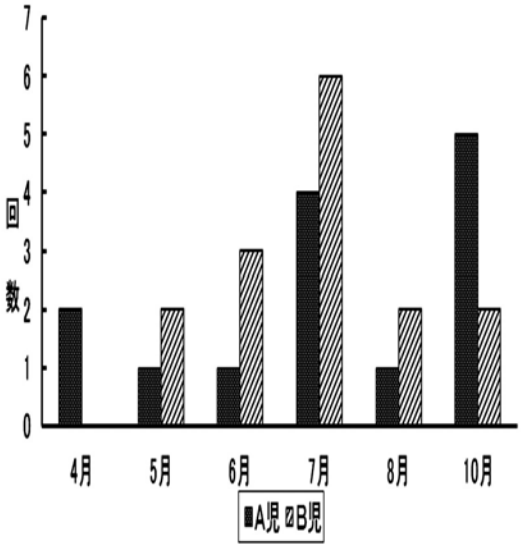

Fig.４　行動提案（月別比較）

理由として，４月がＡ児からＢ児へ向けられた発言が多く，遊びの提案をするのもＡ児が主であったことや，５月からはＢ児からの行動提案も増えたため，Ａ児の提案が減少したと考えられる。

６月から７月まで増加している理由としては，共同遊びになったことで，自分のイメージを相手に伝えるために，Ａ児Ｂ児ともに行動提案が増加したことが考えられる。８月からの値が減少した理由としては，発話総数自体が少なかったため，行動提案も減少したと考えられる。10月には，Ａ児の値は大幅に増加しているがＢ児は８月と比較して変化がない。このことから，遊びがＡ児主体になってきているということが出来る。

次に，説明要求（Fig.５）と説明要求への返答（Fig.６）について述べる。Ａ児Ｂ児ともに，観察当初の４月の時点では，説明要求も説明要求への返答も全く見られない。５月からは，Ｂ児の説明要求や説明要求への返答は徐々に増加しているが，Ａ児の説明要求への返答については４月から６月にかけて，全く見られていない。このことから，Ｂ児の説明要求を聞きとることができていないと考えられる。この時期の様子として，Ｂ児の行動提案に対して，Ａ児が無視しているような場面が観察された。しかし，７月からは，行動提案

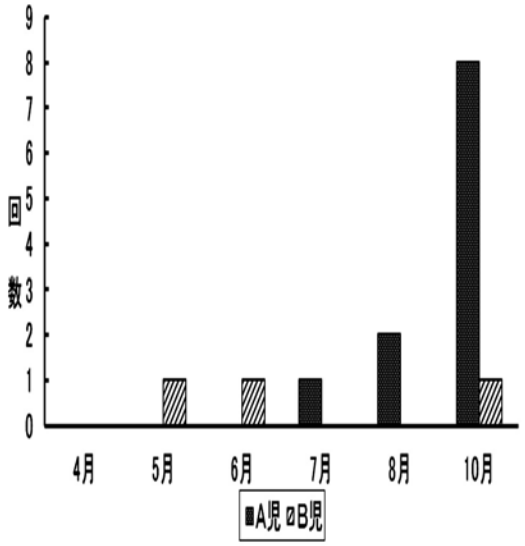

Fig. 5　説明要求（月別比較）

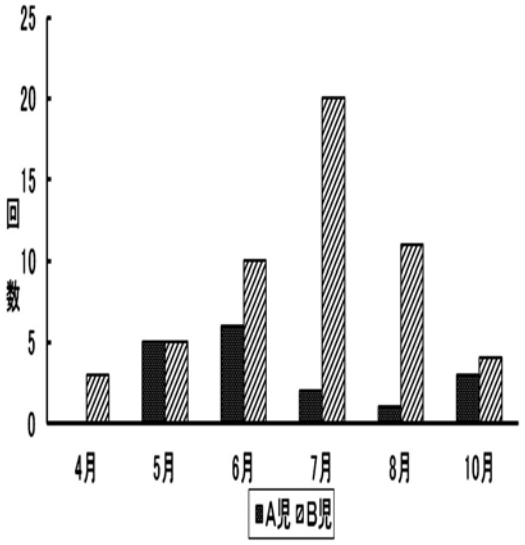

Fig. 6　説明要求への返答（月別比較）

への返答が徐々に見られるようになり，10月まで増加しているため，A児がB児の説明要求を聞き取り，答えることが出来るようになったということが考えられる。10月に関しては，B児の説明要求が大幅に増加しているため，A児が返答する場面が多くなり，説明要求への返答が大幅に増加したと考えられる。

禁止拒否については，観察当初の４月ではA児には全く見られなかったものが５月から少しずつみられるようになった（Fig. 7）。５月と６月は数値的にも多くなっているが，それ以降はあまり大きな変化は見られない。また，このカテゴリーでより特徴的なのはA児よりもB児である。B児の禁止拒否に分類される発話は増加傾向にありながら，７月をピークに減少している。これは，観察当初はB児が遊びを主導する場面が多くみられていたものが，時間の経過とともにA児が主導する形になりつつあったということを示唆している。また，それまでは遊び場面の中で互いの共有しているイメージの違いから言い争いをする場面も多くみられたが，８月以降はA児の指示をB児が上手く汲み取りながら遊ぶ場面を見ることができるようになった。これらの理由から，８月以降のB児の禁止拒否の発話が減少したものと考えることができる。

次に，受容理解のカテゴリー（Fig. 8）についてみてみる。まずA児の数値であるが，８月に目立って増加していること以外はあまり大きな変

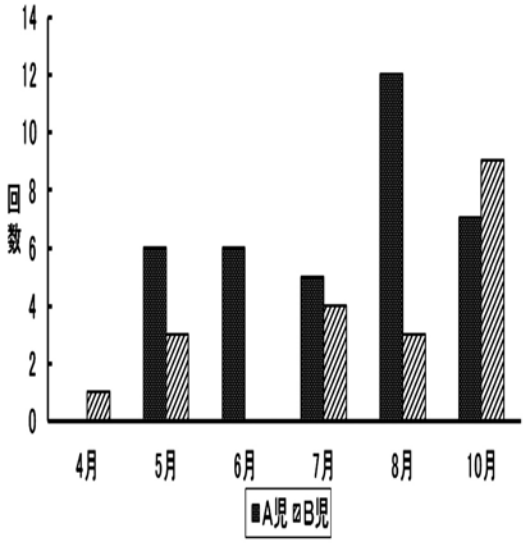

Fig. 7　禁止拒否（月別比較）

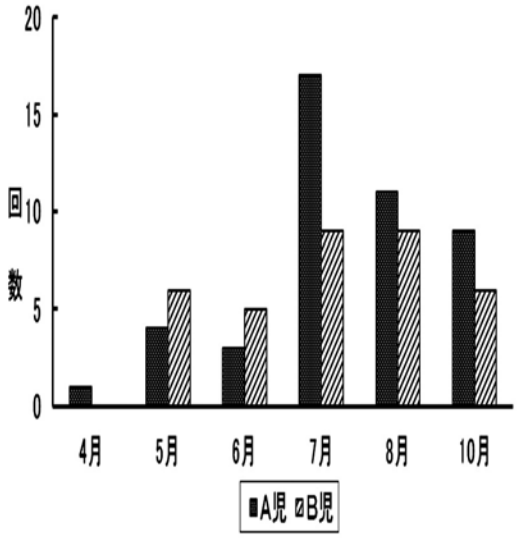

Fig. 8　受容理解（月別比較）

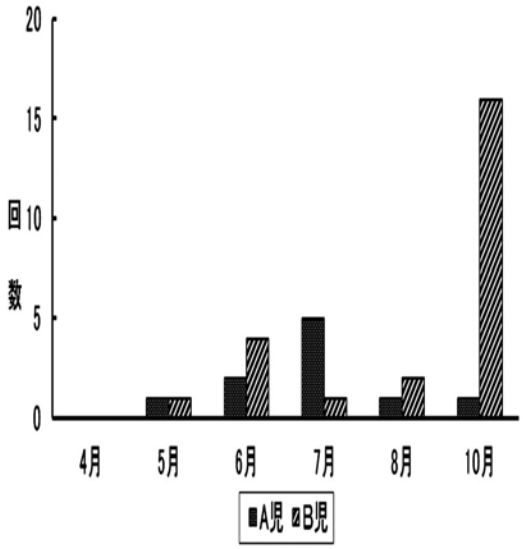

Fig. 9　内的表出（月別比較）

化が見られない。一方でＢ児の数値を見てみると，６月を除いては数が増加傾向にある。このことは，二人の遊びの形態が大きく影響しているということが考えられる。Ｂ児の受容理解の発話数が増加することでＡ児はより発言しやすい環境となり，さらにお互いのイメージを確認し合い，受け止めながら遊びを展開することができるようになったと考えられる。このように相手を否定するのではなく，受け止め，共感するということは，他者との人間関係を深める上で非常に重要な点である。

最後に，禁止拒否と照らし合わせながら見ておきたいカテゴリーが内的表出（Fig. 9）である。Ａ児に注目してみてみると，６月までと比較して７月以降はその数そのものが大幅に伸びていることが分かる。数値としては，７月以降のすべての月でＢ児を上回る結果となった。その理由としては，以下のようなことが考えられる。６月頃までのＡ児は，遊びの中で自分の納得のいかないことがあると「だめ，違う。」などといったように相手を否定する形で自分の感情を表出している場面が多くあった。しかし，７月以降は内的表出の数値が大幅に伸びていることからも分かるように，「だめ，Ａ君はお家作りたいと。大きく作りたいと。」など，より具体的に自分の感情を表出できるようになった。さらに，Ｂ児の７月と10月の会話の内容を比較してみると，禁止拒否の数が５分の１にまで減少し，一方で受容理解が伸びていることが分かる。この結果から，お互いの伝えたい気持ちや自分のイメージをより具体的に相手に伝えることができるようになったため，対象児間で言い争いや喧嘩などが徐々に減少する傾向がみられたと考えられる。

次に，全６回の記録の中でもさらに観察開始時である４月と終了時の10月，Ａ児の発話記録を取り出した。カテゴリーの割合を比較したものをFig.10～Fig.11に示し，その特徴について述べる。また，４月，10月の前半，後半の会話から一部のエピソードを抜粋し，ノートにまとめた。その際，記録を比較し，特徴的な変化が見られた箇所を下線で示した（Table 2～Table 3）。

Ａ児の観察開始当初の４月は発話そのものの数が少なく，その機能についてもカテゴリー別にみてみるとわずか４種類（Fig.10）と，会話の質としては未熟さがみられた。また，この時期のコミュニケーションの実態としては，自由遊び場面において会話の相手であるＢ児との視線はほとんど合わず，話をする際も視線は積み木に向いた

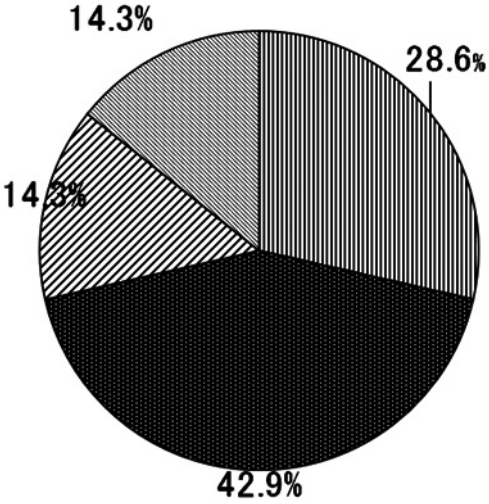

Fig.10　A児の発話の機能分析
カテゴリーの割合（4月）

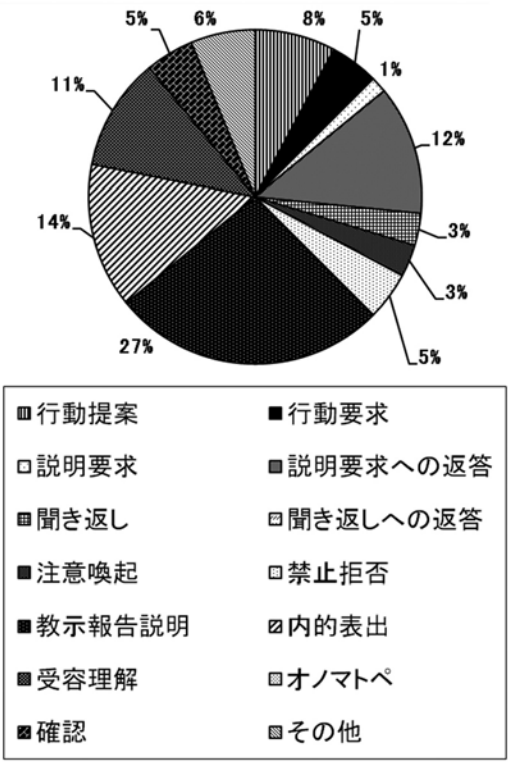

Fig.11　A児の発話の機能分析
カテゴリーの割合（10月）

ままであることが多かった。遊びの実態としても，両対象児間で会話がほとんどなかったこともあり，互いに平行遊びを続けるだけであった。以下に4月時の開始10分の会話の様子をまとめたノートを載せている（Table 2）。前半の会話場面をとりだしてみてみると，10分のうち沈黙の合計時間が6割を占めているという結果になった。話をしたとしても，会話が1回で終了することが多く，会話が連鎖しているとは言い難い場面が多く見受けられた。発話総数が少なかった理由としては以下の2点が考えられる。1点目は，初回の取り組みであったため，両対象児が周囲の環境や取り組みそのものに萎縮していたということである。取り組みを見学していた母親も「普段兄弟間でみられるような会話のレベルには達していない」という印象を受けていた。そして2点目は，遊びの形態が平行遊びであったことが挙げられる。お互いを干渉する場面が少なく，A児が話しかけてもすぐに会話が終了する場面が多かった。

10月は7月と比較して発話総数が減少したものの，「その他」のカテゴリーに分類されるような発話自体は減り，話の内容の質としては向上したと考えることができる（Fig.11）。内容としては，まずB児の説明要求が増加したことに伴い，A児の説明要求への答えに大きな伸びがみられた。

カテゴリーに分類された会話の内容をさらに具

Table 2　4月のノート（前半10分間）の一部

時間	対象児の発話	遊びの様子
	(沈黙　1分48秒) A児：B，これはまった。 B児：ん？ (沈黙　2分32秒) A児：ちょっとこれ使っていい？ B児：だめ。 (沈黙　1分13秒) A児：できる？できる	お互いに視線を合わせることはない。※1 互いに背を向け，平行遊び※2をしている。 A児がB児の顔を覗き込むものの，A児はそれに静かに従っている。

※1　4月の段階ではB児に対してほとんど視線が合わなかった。
※2　遊びの形態は平行遊びであり，互いに会話をしながら協調して遊びに参加する様子は見られなかった。

Table 3　10月のノート（前半10分間）の一部）

時間	対象児の様子	遊びの様子
	A児：(見ていない) わちちがいい，A。 B，これいらんね。あ，これは！お水ジャーって。 B児：あ，これはいいね。ん？どこ？こっちか？ A児：んーっと…。 B児：あ，ちがう。いっぱいないところ，どこなんやろ？ A児：あ，これは？これ。これやったら２個作れるよ，２個。	積み木の穴から水が流れるジェスチャーを用いてB児に説明している。 A児に同意し，A児から積み木を受け取って置く場所を相談している。 B児の目を見て※3 新しい別の積み木を提示し，その積み木について説明している。

※３　確認をする際などにきちんと会話の対象であるB児を見て話せるようになっている。また，A児は数を理解しづらい弟に対し，指で数字を示して分かりやすく伝えようとする様子が窺えた。

体的にみてみると，オノマトペが徐々に遊びの中で出現するようになった。これは日頃の生活で経験したことを遊びに反映させながら，より豊かに見立て遊びができるようになったことを示唆している。このことからも象徴遊びがより高次的になったことで，会話の内容が多様になり発話総数も増加したということができる。このことは，前述した小山（2002）の報告とも合致する。

カテゴリーの比較から会話の内容が多様化していることが分かるが，会話の一文をとりだしてみてみてもA児の言葉の発達は顕著である（Table３）。会話の中に具体的な積み木の数やB児に対する指示が表れるようになった。

３．働きかけに対するA児の応答率について

３つ目の観点として，働きかけに対するA児の応答率について検討していく。20分間の会話の中でB児とTがA児に対して質問した数とそれに対する返答数から導き出される応答率をまとめた(Fig.12～Fig.14)。

はじめに，前半のB児からの質問や呼びかけに対するA児の応答率について述べる。４月では，

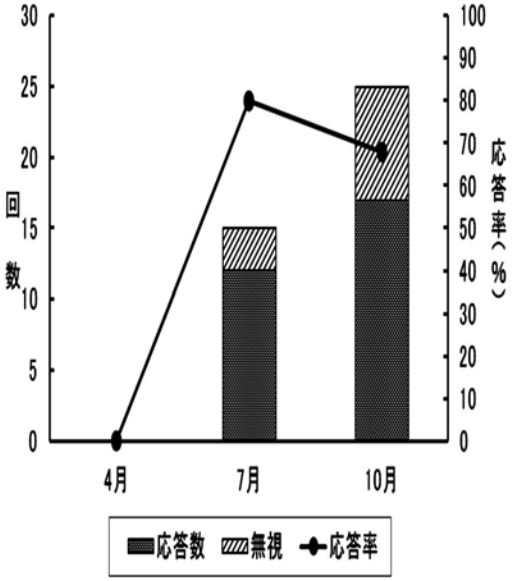

Fig.12　B児の質問数とそれに対するA児の応答数，無視，応答率（前半10分）

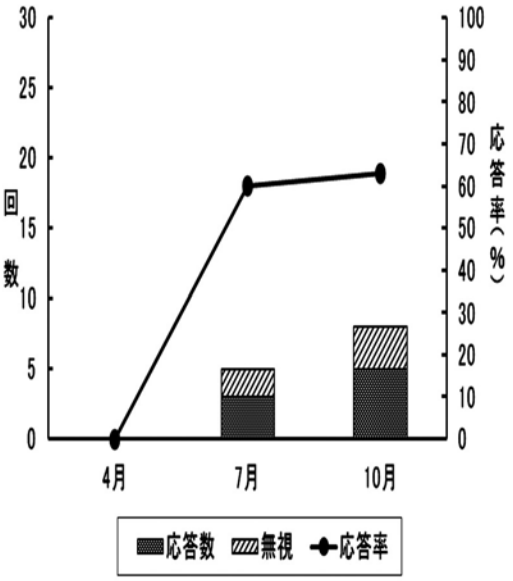

Fig.13　B児の質問数とそれに対するA児の応答数，無視，応答率（後半10分）

発話自体が少なく，話しかける場面があってもA児からB児へ話しかける会話が多く，質問や呼び

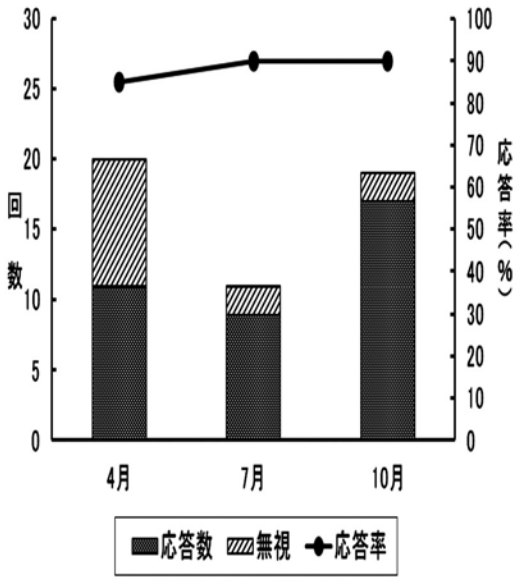

Fig.14　Tの質問数とそれに対するＡ児の応答数，無視，応答率（後半10分）

かけ，返答，無視の全てが０回であった。これは，後半も同様であった。一方，Ｔからの質問や呼びかけに対しての応答率は85％と高く，質問の主旨を理解する能力そのものに大きな問題はないと考えられる。しかしながら，質問や呼びかけに対して非言語的な手段で会話を維持する姿が多くみられ，自身の意志や感情を言語で表出する段階には至っていない。

７月については，Ｂ児からの質問や呼びかけが大幅に増加している。その際，前半10分では，Ａ児の応答率は80％と高いが，後半は60％と低下している。その理由として，後半は質問や呼びかけをする相手がＢ児だけでなく，Ｔが加わったことにより，質問や呼びかけのタイミングが重なったことや，自分に対する質問であることに気づかない場面が増加したからだと考えられる。また，Ｔからの質問や呼びかけに対する応答率が90％と高いことから，Ｂ児よりもＴからの質問や呼びかけに集中していると考えられる。

10月については，Ｂ児主導の遊びからＡ児主導の遊びに移行し，Ｂ児がＡ児のイメージを共有しようとするため，前半のＢ児からの質問や呼びかけは大幅に増加している。そのため，Ａ児は質問の全てを聞き取ることができず，返答しない場面が増え、応答率も68％と低下している。後半10分は，Ｂ児からの質問や呼びかけは低下したものの，応答率は前半に引き続き63％と低かった。

この理由として，Ｔからの質問や呼びかけが増加していることによって，Ｂ児の質問や呼びかけに対する意識が薄くなっていること，Ｂ児からの質問や呼びかけがＡ児に向けられたものだと気付いていないということが考えられる。これに対して，Ｔからの質問や呼びかけに対する応答率は90％と高い。これは，７月と同様の理由が考えられる。加えて，Ｔの質問や呼びかけ方が影響しているのではないかと推測できる。例えば，Ａ児がＢ児の積み木の置き方に納得がいかず，「なんで！」と繰り返していた際に「Ａ君，これをどうしたいの？ここ（指差しながら）が見えるようにしておきたいと？」など，具体的な例を提示することで，Ａ児にとって返答しやすい条件になったと考えられる。

以上のような結果から，Ａ児の応答率はやや伸びているということができる。しかし，３人以上で会話をする場合にはＡ児が自分の意志を表出しにくくなることや，会話場面において消極的になってしまうことで会話についていけなくなるなどの困難が生じるということが課題として挙げられた。

Ⅳ．まとめ

本研究では知的障害を伴う聴覚障害幼児の兄弟間において，イメージの共有から会話が生まれやすい積み木遊びを通して考察を行った。

分析の結果，Ａ児の発話総数に大きな伸びがみられ，さらに会話の内容にも多様性が見られるようになった。しかしながら，本研究におけるＡ児の遊び相手は兄弟という身近な存在であったことから，自らの意志や感情を表出しやすく，さらには受け止めてもらいやすい相手であったと考えることができる。今後は遊びやコミュニケーションの対象を少しずつ広げていくことで，より他者への興味を持たせ，積極的に働きかけることができるようにしていく必要がある。

来年度から対象児は小学校に進学し，これまでとまた異なった環境の中で生活していくこととなる。争いや喧嘩を含め，現在兄弟間で行われてい

るような相互交渉は第三者とのコミュニケーションをする上で非常に大きな意味を持つ。現段階でそのようなコミュニケーションの基盤を母子間や兄弟間，さらには家族間で築いていくことこそが第三者とのコミュニケーションを円滑にするための基礎となると考えることができる。

Ⅴ．謝辞

ご協力いただきました対象児とそのご家族に心より深くお礼を申し上げます。

Ⅵ．文献

Dore, J. (1978) Conditions for the acquisition of speech act. In I.Markove (Ed.), The social context of language. John Wiley & Sons Press, New York, 87-111.

藤崎春代・無藤　隆（1985）幼児の共同遊びの構造―積木遊びの場合―．教育心理学研究第33巻第１号，33-42.

Hartup, W.W.（1981）「幼児の社会的世界」，依田明監訳.『現代児童心理学４　情緒と対人関係の発達』．金子書房，52.

飯野晴美（1996）「きょうだい関係」，青柳肇他編『パーソナリティ形成の心理学』福村出版．133-142.

小山　正（2002）子どもの象徴遊びとことばの発達．こころとことば．１，43-50.

大浜幾久子・斉藤こずゑ・武井澄江・萩野美佐子（1984）言語行動の発達(Ⅶ)　母子相互交渉における動作と言語（生後３年間の縦断観察資料の分析）．東京大学教育学部紀要，24, 61-80.

大塚真理子・小大塚美音・鶴　祐美子（2012）知的障害を伴う聴覚障害幼児を対象としたままごと遊びにおける会話の発達的変化．平成23年度福岡教育大学卒業論文.

柴田利男（2010）きょうだいとのコミュニケーションが幼児の社会的認知の発達に及ぼす影響．北星論集．47, 1-10.

吉田俊和（1991）「きょうだい関係」，松田　惺『新児童心理学講座：家族関係と子ども』．第12巻，234-247.